

秋論 大江千里集 (十二)

【前説】

本稿は、次に示すものの続稿である。

- 「秋論大江千里集(一) (二) (四) (六) (八) (十) (十二)」(『長野工業高等専門学校紀要』五二号～五六号、二〇一七年～二〇三年。いずれも電子版のみ) および「秋論大江千里集(三) (五) (七) (九) (十一)」(『共立女子大学文学部紀要』第六五集～第六九集、二〇一九年～二〇二三年)。今回は、秋部の四六番歌～四九番歌の四首を取り上げる。

本秋論全体の目的と意義の詳細、凡例や参考文献などについては、「秋論大江千里集(一)」を参照されたい。

【秋論】

「旅雁秋深独別群(旅雁 秋深く独り群と別る)」

四六 ゆくかりのあきすぎがたにひとりしもともにおくれてなきわたるらん

【通釈】

どうして、飛び行く雁が、秋の過ぎる頃に、たった一人で、友に遅れて鳴き続けることになったのだろうか。

【語釈】

ゆくかりの 本集で、雁は六例(四六・四九・五三・五四・一一六)あり、鶯とともに、鳥とし

小池 博明
半沢 幹一

て取上げられるのが、もつとも多い(二番歌の【語釈】「うぐひすの」の項で、雁の用例を五例としたが、句題に「雁」とありながら、歌本文にそれが詠まれない五番歌を含めると六例となる)。「ゆくかり(行く雁)」という表現は、万葉集には見られず、平安時代になってから、「ふるさとおもひやりつつゆくかりのたびのころはそらにぞあるらむ」(躬恒集・二〇)、「うきことをおもひつらねてゆくかりのなきそわたれ秋のよなよな」(伊勢集・一四〇)、「はるがすみたつを見すてゆくかりは花なきさとにすみやならへる」(古今集・二・春上・伊勢・三二)、「ふるさとの霞とびわけゆくかりはたびのそらにやはるをくらさむ」(拾遺集・一・春上・五〇)などのように、よく詠まれるようになる。前二首が秋の雁(躬恒歌は、延喜七年九月に行われた、宇多法皇大堰川御幸の際に詠まれたもの)で、後二首が春の雁であって、帰雁のみならず来雁についても用いられる。つまり、「ゆく」は詠み手の視点からの方向性は問わず、単に飛行中であることを表わす。同様の指摘は、『伊勢集全釈』八九番歌の補説にもある(秋山虔・小町谷照彦・倉田美編、角川書店、二〇一六年)。当歌の雁は、秋歌であるから、日本から見れば、来雁であり、本集では、他に二例(四九・五三)あるが、どちらも秋歌である。格助詞「の」は主格を表わし、下句の「おくる」と「なきわたる」双方の動作の主体であることを示す。

あきすぎがたに 「すぎがた」は、「あき(秋)」が「過ぎ方」(秋が過ぎる頃、秋の末頃)という解釈と、「かり(雁)」が「過ぎ難」(秋という季節に、雁が行き過ぎにくい)という解釈

の二つの可能性が考えられる。全訳では「雁の過ぎがたく」のように、雁を主語とするが、同文の赤人集七一番歌に対して、和歌文学大系本は「秋も過ぎようとする頃」のように、秋を主語ととっている。鎌倉時代までの和歌において、「秋過ぐ」という語連続は、「秋方過ぐ」という関係ばかりであるから、当歌も、秋が過ぎる頃の意でとっておく。「あきすぎがた」という表現自体は他に検索したいが、「はるすぎがたに」が「山ざゝらるるすぎがたになりぬればかぜぢらさねどのこりやはする」(道濟集・二四〇)とあり、同様に、その季節が終わる頃の意とみなす。

「ひとり」は「ゆくかり」について言う。これは、「雁行(がんこう)」という語もあるように、雁は普通、複数で行列を成して飛ぶのに対して、異例の事態であることを示す。一首に「かり」と「ひとり」の両語を詠み込む歌は平安時代から見られるものの、「あづまぢのいさめのさとばかりのながよをひとりあかすわがなか」(古今六帖・二・さと・二二九五)、「ふゆの夜をひとりねさめにおきたればおなじ心にかりもなくなり」(賀茂保憲女集・一三〇)、「さ夜ふかき雲井にかりも音すなりわれひとりやはたびのそらなる」(撰政左大臣家歌合・四・源雅光)のように、「ひとり」は直接的には作者の状態を言うことがほとんどであって、当歌のように、雁が一人(一羽)というとは異なる。そうした中で、「るいよりもひとり はなれてとぶかりのともにおくるわが身かなしな」(好忠集・四三二)は、雁を「ひとり」という語によって擬人的に表現する点で、当歌と同様である。「ひとり」に強意の副助詞「しも」の付く用例は稀で、古今集の頃には、他に「ひとりしもあきにはあはなくよのなかのかなしきことをもてなやむらん」(是貞親王家歌合・六〇)、「ものおもふとひとりしもわがおきつればうみべのたつもよはになくなり」(秋秋集・七)がある程度であるが、本集には、他に「しののめに秋をく露のさむければただひとりしもむしのなくなる」(五〇)もある。是貞親王家歌合を除いた二首は、詠み手以外の生き物の孤独を、その鳴き声のありようから感じ取っている歌である。

ともにおくれて 群を離れて飛ぶ雁を詠む歌は万葉集には見られず、当歌が初例か。当歌以降に、「前項「ひとりしも」で挙げた好忠百首の歌や、「秋霧をわけゆくかりは何なれやおくれてのちにまじふけふかな」(順集・二九三)、「いにしへのかりのかずにもおくれにき此世にもまたさきだちぬるか」(赤染衛門集・六一二)などが見える。好忠集や順集の諸注が指摘するよう

に、当歌がこれらの好忠歌や順歌に影響を与えた可能性が大きい。「とも(友)」は前句の「ひとり」同様、擬人性を伴うが、「さ夜中に友(友)呼ぶ千鳥物思ふとわび居る時に鳴きつともとな」(万葉集・四・大神女郎・六一八)や「高山の峰行くししの友(友)を多み袖振らず来ぬ忘ると思ふな」(万葉集・一一・二四九三)などのように、万葉集から動物にも用いられた例が見られる。

なきわたらん 雁について「なきわたる(鳴渡)」という用例は、万葉集から見えず、「家離り旅にしあれば秋風の寒き夕に雁鳴き渡る」(鴈喧度)「(万葉集・七・一一六二)、「秋の田の穂田を雁がね(鴈之音)暗けくに夜のほじろにも鳴きわたるかも(鳴渡可聞)」(万葉集・八・聖武天皇・一五三九)「葦辺なる萩の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る(鴈鳴渡)」(万葉集・十・二二三四)など見られる。これらにおける「なきわたる」は、「なく」も「わたる」も実質的な動詞であり、「わたる」は移動を表わす。当歌も同様に捉えるのが妥当であろうが、第二句の「ゆく」との重なりを考えると、補助動詞として、鳴き続けるの意を表わすのではあるまいか。「なく(鳴く)」は、単に雁の自然的な行為を表わすのではなく、秋と別れがたく、あるいは友に遅れて、嘆くことを意味する「泣く」を暗示する。「なきわたる」の涙やおちつらむ物思ふなどの秋のうへのつゆ」(古今集・四・秋上・三二二)、「かへし袖までもひなくに秋の田をかりがねさへぞ鳴きわたるなる」(貫之集・二六二)などの例は、鳴く＝泣くの関係を端的に示すものであつて、その孤独な鳴き声を焦点化するならば、「なきわたる」の「わたる」を移動よりも継続と捉えるほうが効果的であると考えられる。右に挙げた万葉集の「なきわたる」は結句に多く、二種の類型がある。一つは、一一六一・二二三四番歌のように、「雁鳴き渡る」と「雁」を句頭にするもの、もう一つは、一五三九番歌のように終助詞が歌末語となるものである。後者は、平安時代になると、助動詞を歌末語とする用例が現れる。助動詞のほとんどは、「かへし袖までもひなくに秋の田をかりがねさへぞ鳴きわたるなる」(貫之集・八二)、「すむさとほさだめなければたびのかりそらにぞうきてなきわたるなる」(賴基集・二四)などのように、伝聞推定の助動詞「なり」か、「ひたすらにわがおもはなくにおのれさへかりかりとのみなさわたらん」(後撰集・七・秋下・三六四)、「とどまらぬはるををしむにいとどしくかへるかりさへなきわたらん」(中務集・一八)などのように、推量の助動詞「らむ」である。この歌末語の変化は、感動を直接訴えかける万葉集から、叙述内容と詠み手との関わり方を言葉によ

つて示す（詠み手が事実を再構成する）古今表現への変化を、よく示す。当歌は、歌末を「らん」とする、早い用例である。なお、【補注】参照。

【補注】

底本には、当歌の前に「或本」という書き入れが見られる。藏中さやか『題詠に関する本文の研究』によれば、「或本と校合したところ、本文にはない歌が含まれていたため、或本によって補った歌である」ことを示すというが、本積論では他歌と同等に扱う。その理由は【比較対照】に述べる。

当歌は構文的には倒置も挿入もない、語順どおりの一文から成り、いたって平易な表現であるが、その分だけ、何を趣意とするかが問題になりそうである。歌末に「らん」という助動詞があるので、歌に詠まれた実景をそのまま描写した歌とは言えない。しかし、それでは、何を、なぜ推量したかということが、当歌の表現からは明確には読みとりたいのである。

「らむ」の用法は、大きく現在推量と、原因・理由の推量の二つに分けられるのが一般的であり、北原保雄「『らむ』留めの歌における既定と推量——原因などを推量する意味はどこから生じるか——」（『表現文法の方法』大修館書店、一九九六年）によれば、現在推量は、確定的事態がなく、事態全体を推量し、原因・理由の推量は、確定的事態を前提に、事態の一部や、その事態の存立する原因・理由などを推量する。いわば、前者は全体推量であるのに対して、後者は部分推量である。

しかし、当歌における「らん」は、そのどちらにも当てはまらない。内容全体の推量とする場合、なぜそれを推量の対象としなければならないかが図りがたく、部分推量とする場合は、前提となる確定的事態とその原因・理由のそれぞれにどこが相当するのかが区別がたい。たとえば、雁が一羽だけで鳴き渡っているのを確定的事態とみなしたとしても、「ともにおくれ」たから「ひとり」であると推量するのは、あまりにも当然すぎるよう。

とすれば、全体を作者の知覚した確定的事態として、その原因・理由を「どうして」と推量する用法と考えるべきだろう。すなわち、構文的にも酷似する「仄方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（古今集・二・春下・紀友則・八四）と同様の用法である。古今歌では、「ひかりのどけき」と「しづ心鳴く花のちる」という、矛盾した眼前の事態の原因や理由を「どうして」と推量することになる。当歌では、対象となる雁が、①秋の初めではなく終わりこ

ろ、②群でなく一羽、という二つの、通常とは矛盾する事態について、「どうして」とその原因・理由を推量しているのである。

もとより、古今歌も当歌も、そのような素朴な疑問を表明することが詠歌の目的ではない。古今歌は散る桜を惜しむ気持があつてのことであり、当歌は雁をとおして、詠み手自身の孤独の悲しみがあつてのことである。

なお、「らむ」は「けり」とならんで、古今的表現を代表する助動詞であるが、古今集では、句末（歌末も含む）の「らむ」一〇八例、「けり」一九九例で、ほぼ一対二の比であるのに対して、本集では、「らむ」九例、「けり」四六例で、ほぼ一対五の比となり、古今集に比較して、相対的に「らむ」が非常に少ない。ここにも、本集歌の表現上の特徴が見られる。

なお同歌は、赤人集に「ゆく雁の秋過ぎがたにひとりしも友におくれて鳴きわたるかな」（七一）とあり、歌末が異なる。

【比較対照】

底本では、この四六番歌から五〇番歌まで、句題を欠く。この点について、橋本不美男『流布本『大江千里集』（句題和歌）の原型について』（『王朝和歌 資料と論考』笠間書院 一九九二年）、竹原崇雄『大江千里『句題和歌』の成立——欠題歌の処理について——』（『文学』一九八七年）は、錯簡などの書誌的事情によるとする。これに対して、藏中前掲書は、夫木抄所載の四六番歌（夫木抄 六三〇九番歌）は、異本系書陵部本と同じ句題が付されているのに、五〇番歌（夫木抄 五五〇七番歌）には句題がないことから、必ずしも同時に句題が欠落したとは考えられず、これまでは伝写上のミスとされ、書陵部本で句題を補ってきたが、検討を加える必要があるとする。

また、序には全二二〇首とありながら、現存伝本の多くが二二五首であることから、五首が増補されたとする考えがある。全釈は、四五番歌から五〇番歌の五首の中で、あるいはその前後に歌材や内容の重なる歌があることや、原拠詩がみられないという共通点から、詠作時のメモや後人の書き入れの混入の可能性を指摘する。つまり、千里の献上本には、この五首は含まれていなかったということである。

本集歌の妥当な評価を目的として、評価に必須の句題との関係や表現史的位置づけをめざす本積論では、まずは句題の存在が前提となる。句題の有無自体が千里歌の表現のありようによ

うに関わるかについては、句題とは関係なく詠まれた千里歌との詳細な比較検討が必要であろう。この五首には、「あきすぎがた」（四六）、副助詞「さへ」の重複（四七）、「からくれなゐにしるる」（四八）、「しもをしのぎて」（四九）、「ただひとりしも」（五〇）などの、古今集の頃としては希少な、換言すれば、当時の歌に用いるのが不自然とも言つべき用例がある。このような用語は、これまでも本集歌で見られた特徴であり、その不自然さの理由の一つに、句題の制約があると考えられる。そこで、ひとまず異本系書陵部本の本文に付された句題と比較対照することとし、各冒頭にはカッコに入れて示してある。

句題の語のすべてが歌の表現に写されていることは、一目瞭然である。内容の核となる、「旅雁」に対する「ゆくかり」、「秋深」に対する「あきすぎがたに」、「独」に対する「ひと」、「別群」に対する「ともにおくれ」であり、歌で補われた実質語は結句にある「なきわたる」くらいである。とすれば、あくまでも憶測にすぎないが、かりに当歌の句題が後に付されたとしても、七言句の句題を創作的に当歌から導くのは、そう難しいことではなかったのではあるまいか。

ただし、表現意図として考えれば、当の句題と歌では大きな違いがある。句題を含む詩は未詳であるが、単独では実景描写を意図したとしか捉ええないのに対して、歌では「しも」という助詞や「らん」という助動詞によって、単に音数律を整えるためではなく、詠み手自身の思いを表現することが意図されたと見られる。このような意図の改変は、本集の先行する歌においても指摘してきたところであり、当歌に限ったものではない。

〔涼風露転寒（涼風に露は転た寒し）〕

四七 ふくかぜのおとたかくさへきこゆればおおくつゆさへもさむくもあるかな

【通釈】

吹く風の音（私についての噂）がやかましいほどに聞こえるので、（袖に）おく露（のような私の涙）までもが冷たいことだなあ。

【語釈】

ふくかぜの 九番歌【語釈】「そらなる風の」の項で述べたように、「風」は、本集で比較的多く詠まれる。当歌では、次句との関わりから、風の音に焦点を置いているが、同様の例は、「我がやどのいささ群竹吹く風の音（希久風能於等）のかそけきこの夕かも」（万葉集・十九・大伴家持・四一九一）、「紅葉せぬときは山は吹く風のおとにや秋をききわたらむ」（古今集・五・秋下・紀淑望・二五二）「玉かづら今はたゆとや吹く風のおとにも人のきこえざるらむ」（古今集・十五・恋五・七六二）などのように見られ、「吹く風の音」という句として定着していたと見られる。

おとたかくさへ 初句からの「ふくかぜのおと（吹く風の音）」という表現は、前項挙例のように、第三句十第四句に置かれることが多く、当歌のように、初句から現れる用例は少ない。三代集時代まででは、「ふく風のおとにききつつさくらばなめにはみえでもちらす春かな」（村上天皇御集・六）、「吹く風のおとにもたえてきこえずは雲のゆくへをおもひおこせよ」（和泉式部集・三〇九）がある程度である。「たかく」が風に関して用いられる歌として、「風高く（風高）」辺には吹けども妹がため袖さへ濡れて刈れる玉藻で（万葉集・四・紀女郎・七八二）があるが、これは風の吹く空中の位置についてである。ただ、「ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しも（川音高之母 あらしかも速き）（万葉集・七・柿本人麻呂歌集・一一〇一）や「紀伊の海の名高の浦に寄する波音高きかも（依浪音高島 逢はぬ兒故に」（万葉集・一一・二七三〇）など、自然現象の音に関して用いられる場合もあるので、当歌でも、風の音が高音である様を表わすと一応みなすことができる。ただし、音が高いことが必ずしも、大きいことや激しいことを表わすわけではないし、それだけでは下句とのつながりを読み取るのは難しい。【補注】参照。

きこゆれば 接続助詞「ば」は、上句を確定条件として統括し、下句に連接する。「きこゆれば」は、万葉集にはなく、当歌が最初期の用例であり、以後も案外用例数は多くない。そのほとんどは当歌同様、第三句に位置する。その中で、元良親王集には、「やどりゐるとらあまたにきこゆればいづれをわきてふるすとかいふ」（元良親王集・四九）、「わががたにながれてかゆくみづくきのよるせあまたにきこゆればうし」（元良親王集・五三）「よの中にあき山にのみきこゆればいつしかのねもみみなれにけり」（元良親王集・一〇三）と三例あって注目され、とくに留意したいのは、このうち、四九・五三番歌は噂を聞くことを含意することである。

おくつゆさへも 当歌では、「おくつゆ（置く露）」がどこに置くのか、その場所が示されていない。植物であれ袖であれ、その場所が示されるのが一般的であり、「…立つ霧の 失せるがごとく 置く露の（置露之） 消ぬるがごとく…」（万葉集・一九・大伴家持・四二四）のように、場所の特定を必要としない、歌語的表現と見ることもできる。そうでないとしたら、その場所が自明であるか、あるいは一ヶ所でない、という可能性が生じる。当歌では、「さへ」という副助詞が第二句と重なって、和歌表現としては、忌避される措辞であるが、「おとたかく」と「おくつゆ」以下を、ともに何かに添加し、連動して事態のひびきを表わすために、あえて反復的に用いたとも考えられる。【補注】参照。

さむくもあるかな 「さむし（寒）」は、古くは現代語の「冷たい」と同じ意も表す。平安中期以降に、新しくできた「つめたし」と意味を分け合い、現代語の身体の寒暖の感覚を表すようになる。時代的にはどちらともとれるが、当歌においては、空気ではなく露という物に関してであるから、冷たいの意ととっておく。露を「さむし」とする用例には、「露霜の寒き（露霜乃寒） 夕の秋風にもみちにけらし妻梨の木は」（万葉集・十・二八九）、「秋の夜はつゆこそ（こと）にさむからし草むらことにむしのわぶれば」（古今集・四・秋上・一九九）などがあり、本集にも当歌以外に、「しののめに秋おく露のさむければただひとりしもむしのなくなる」（千里集・五〇）がある。露が冷たいのは、風に吹かれるためであるが、風のために露が「寒し」という用例は、鎌倉時代までで、「ひたぶるに見ぬ人こひしあきかぜにややつゆさむき長月のすゑ」（千五百番歌合・宮内卿・一六〇二）くらいしか見出せない。なお、「さむし」は、本集に九例あり、露以外に、霜・風・夜・谷などに関して用いられ、古今集の二例（「さむさ」を含む）と比べ、比率的には格段に多く、本集の感覚表現の特徴の一つである。

【補注】

全釈は、当歌の訳として「吹く風の音が高くない時はないので、置く露までも寒そうであるよ」を掲げる。ほぼ直訳であるが、表現上、第三句の「きこゆれば」が反映されていない、結局の「さむくもあるかな」を「寒そうであるよ」としている以外にも、内容的に次の三点の疑問がある。

一つめは、【語釈】「おとたかくさへ」の項に記したように、上句と下句はどのようなつながりのかという点、二つめは、このような実景描写がありうるかという点、そして三つめは、秋歌らしさがどこに認められるかという点である。

第一点について。そもそも露が発生するのは、気温の低下によるものであるから、風が吹けば、さらに低下することになり、露が冷たくなるという事態は想定しうる。しかし、当歌では、「おとたかくきこゆれば」が確定条件表現であつて、そのように聞こえるということが、露が冷たくなることの直接的な要因とはなりえない。

第二点について。「きこゆれば」という表現は聴覚的に、おそらくは屋内で風の音を知覚することは実際にありえるとしても、露を触覚的に知覚しているとは考えがたい（だからこそ、全釈訳が「置く露までも寒そうであるよ」という推定表現になっているのである）。その露が風の当たる草葉に置かならば、なおさらであるし、露自体に触れて「さむし」と感じたことを表現したとも考えがたい。

第三点について。そもそも風も露も秋の風物に限られるわけではない。本集秋部の配列上、直前の四六番歌もふまえ、秋終盤の時期と見れば、風はより強く、あるいはより寒くなることはありえるとしても、露はもはや露のままではなく、霜のほうがかふさわしい。

以上から、当歌を秋歌として文字どおりに解釈することには無理があり、何らかの寓喩を読み取る必要がある。その手掛かりになるのが、【語釈】で言及したことからである。

一つは、「おとたかく」の項で取り上げた「紀伊の海の名高の浦に寄する波音高きかも（音高鳥）逢はぬ兒故に」（万葉集・十一・二七三〇）や「麻久良我の許我の渡りのから梶の音高しも（於登太可思母奈 寝なへ兒故に）」（万葉集・十四・三五五五）、「きこゆれば」の項で取り上げた元良親王集歌である。これらでの「おと」は噂のことであり、「たかし」は噂がはなはだし様を表わす。

もう一つは、「おくつゆさへも」の項で触れたように、露がどこに置くかであり、実体としては草葉や建物に置くことが想定されるが、比喩としては涙が袖に置くというのも、和歌には慣用的に見られる。あえて場所を特定しなかったのは、この両者を掛けるためだったのでないだろうか。

つまり、人間的な寓喩として、おそろくは詠み手自身に関わる、好ましからぬ噂をしばしば耳にしたことから、涙が体も冷えるほどとめどなく流れ袖が濡れる、という状況を詠んだものと考えられるのである。このように捉えることにより、表景描写としての不自然さ、たとえは、なぜ「おと」が「たかく」なのか、「き」ゆれば「を入れるのか」、「さむくもあるかな」という実感的な詠嘆になるのか、などの背景が理解しうる。もとより、そのような状況が秋の終盤という時期にふさわしいものとしてあるからこそ、秋歌としても成り立ちうるのである。

「さ」>「さ」という副助詞の反復は、「おとたかくさへ」のほうは、噂がひときわであることを強調し、「つゆさへも」のほうは、詠み手自身の心身の寒さに加えてということを表わし、両者が密に関連し合っていることを示そうとしたものであろう。

なお同歌は、赤人集に「吹く風の音高くのみ聞こゆるは置く露うたて寒くもあるかな」(七二)とあり、「さへ」の重複が避けられ、「のみ」と「うたて」に代えられている。

【比較対照】

四六番歌同様、異本系書陵部本の句題「涼風露転寒」という五言句と当歌との関係を考えることにする。

句題の語で歌に写されていないのは、「涼」と「転」である。「涼」のほうは「寒」という類義の語との重なりを避けたのかもしれないが、歌では、寓喩を優先して、それとも関連しうる

「おとたかくさへき」ゆれば「に置き換えたと考えられる。「転」のほうは、赤人集に「うたて」とあるように、いよいよ、ますますの意として用いられたとみなされるが、それを「つゆさへも」の「さへも」や「さむくも」の「も」などによって含意しようとしたのであろう。

句題は五言句ということもあり、晩秋の実景的な描写としてしか読み取りようがない(露が寒いことを実感しうるかという問題は歌と同様にあるが)。詠歌の前提として、この句題があったとすれば、これをそのまま歌として展開するには無理があったと想像される。そこで援用されたのが、万葉集における譬喩歌にならった、表の自然と裏の人事という全面的な二重の表現構造である。

ただし、裏の人事を暗示するには、それなりの仕掛けが必要なのであって、右に述べたような句題からの言葉の置き換えや付け加えを、多少の不自然さを覚悟のうえで、行ったのではない

と推察される。逆に言えば、このような句題抜きで、当歌が詠まれたとはきわめて考えにくいということである。

〔樹紅霜更置(樹は紅にして、霜更に置く)〕

四人 このはみなからくれなゐにしぐるとしてものさらにもおきまざるかな

【通釈】

木の葉がすべて韓紅色に時雨れる(散る)ようにしようと、霜がさらに多く置くのだなあ。

【語釈】

このはみな 「こ(木)のは(葉)」については、四一番歌【語釈】「秋のこのはに」の項参照。「みな(皆)」は木の葉のすべての意であり、次句の「しぐる」に係る。

からくれなゐに 「からくれなゐ」は、深い鮮やかな紅色のこと。万葉集には見えず、平安時代

に入ってから、著名な「ちはやぶる神世もきかず竜田河唐紅に水くるとは」(古今集・五・秋下・在原業平・二九四)を始めとして、「あきやまはからくれなゐになりけりいくしほしぐれふりてそめけむ」(左兵衛佐定文朝臣歌合・一五)、「にはのおものからくれなゐになるまでに

あきにあひかねおつるもみぢか」(躬恒集・一五)などのように、紅葉の色の形容として類型化する。当句は、「しぐる」を連用修飾する。

しぐるとして 「しぐる(時雨)」は、下二段活用動詞の終止形。晩秋から初冬にかけて、小雨が降ることをいう。本集では、当歌のみに詠まれる。比喩的には、涙を流す意にも用いられる。時

雨は、紅葉さらには落葉を促すものとして詠まれるものであるから、全釈が「木の葉の紅葉が時雨によって皆深い紅色になり」と意識するのももつともなことである。とはいえ、当歌の上二句

の表現に即して解釈するとすれば、木の葉ヲすべて韓紅色ニシテ時雨が降る、とでもなる。ただ、そうすると、二つの問題が生じる。一つは、「しぐれ」という名詞ならば別であるが、「し

ぐる」という動詞が単独で用いられる場合には、「しぐれつ」もみづるよりも事のはの心の秋にあふぞわびしき」(古今集・一六・雑上・八二〇)の「つつ」、「もみぢばやたもととなるらん神

な月しぐるる」などに色のまされば」(拾遺集・一七・雑秋・凡河内躬恒・一一四〇)の「し」と、「かみな月しぐるるままにぐらぶやましたるばかりもみぢしにけり」(金葉集・四・

冬・源師賢・二五七)の「まま」などを下接して、紅葉との関係が並行的に詠まれることが多く、当歌のように直接的な関係としては詠まれないのである。もう一つは、「とて」を「さ」で、下二句とこのようにつながるかである。「とて」は格助詞「と」と接続助詞「て」の連語とみなされるが、その間に「思ふ」や「あり」が省かれたとみなされるのが一般的で、実質的には引用の「と」とほぼ同様の用法であり、以下に続く主節に対する理由あるいは意図を示す従属節を構成する。つまり、「しものさ」にもおきまざる」ことの理由あるいは意図が「このはみなくれなるにしぐる」だとするならば、霜と時雨は別物であるから、そのような関係が成り立たなくなるのである。これらの問題を解決し、かつ上三句の表現をそのままに受け取るならば、木の葉が時雨れるという主述関係として捉えるとい見方が考えられよう。もとより、その場合、「しぐる」は木の葉が落ちることを比喩的に表わすことになる。そのような意味用法とみなす手掛かりになるのは、「かぜにちるもみぢのいろはかみな月からくれなるのしぐれこそすれ」(躬恒・二二九)や「時雨かとおどろかれつつふる紅葉あかき色をもくもるとぞ思ふ」(順集・二九二)などという、紅葉した木の葉が落ちることを時雨の降るさまにたとえた表現があることである。さらには、「しぐれ行くよものこそ多の色よりも秋は夕のかはるなりけり」(千載集・五・秋下・藤原定家・三五五)や「たつた山秋行く人の袖をみよ木々のこそ多はしぐれざりけり」(新古今集・一〇・羈旅・慈円・九八四)などのように、「しぐる」と「こそ多」が直接結び付けられた表現が見られることである。

しものさ 「しものさ」(霜)「しものさ」については、三七・四二番歌の【語釈】該項を参照。霜は、三七番歌【語釈】該項で触れたように、時雨と同様に、紅葉を促すものとしてだけでなく、「経もなく緯も定めず娘子らが織るもみち葉に霜な降りそね(霜見巻)」(万葉集・八・大津皇子・一五二二)、「秋山に霜ふり覆ひ木の葉散り(秋山霜覆木葉散 年は行くとも我忘れめや)」(万葉集・十・二三四三)などのように、紅葉を散らすものとしても詠まれる。この二つの作用はその時期がいつか、つまり秋か冬かという違いとも関わる。「さ」にも「は」は、結局とくに「まさる」に係り、重ねて、そのうえの意を表わす。「も」はその意を強める。もつとも、万葉集から「現には更にもえ言はず(更毛不得言 夢にだに妹が手本をまき寝と見れば)」(万葉集・四・大伴家持・七八四)のように見られるが、挙例同様に、多くは「ちとせとはさらにもいははじゆくすゑのひとたびすまむよろづよまで」(素性II・五九)、「こひしとは更にもいははじしたひものと

けむを人はそれとしらん」(後撰集・十一・恋三・在原元方・七〇二)などのように、打消語と呼応して、決しての意を表すことが多く、当歌と同じく、打ち消しを伴わない歌としては、「あき山に紅葉とちれる旅人をさらにもかりとつげてゆくかな」(宇津保物語・菊の宴・五七二)、「忘れにし人のさらにもこひしきかむげにこじとは思ふものから」(拾遺集・物名・三六五)などがあるが、ごく少ない。

おきまざるかな 「おきまざる」は、さらに増して置くの意。万葉集には見えず、本集成立とは同時期の寛平御時菊合に「けふけふとしもおきまざるふゆたははなうつるふとらみにゆかん」(寛平御時菊合・七)という、霜に関する用例が見られる。三代集時代までは、「高砂の松にすむ鶴冬来ればおのへの霜やおきまざるらん」(拾遺集・四・冬・藤原元輔・一三七)、「さよ更けて声さへさむき蘆田鶴はいくへの霜かおきまざるらん」(道信集・三〇二)がある程度。「おきまざる」は、「なつはつるあふぎとあきのしらつゆといづれかまづはおきまざるらん」(忠岑集・一七二)、「をみなへしえたたわむまでもよすがらあやふくつゆのおきまざるかな」(山田集・七)などのように、霜ではなく露に関して用いられるほうが多い。これらの歌においては、「おきまざる」に下接するのは、当歌のように詠嘆の終助詞「かな」よりも推量の助動詞「らむ」のほうが目立つ。

【補注】

【語釈】で示したように、第三句末の「とて」が下二句の理由あるいは意図を示すとすれば、無生物の霜を擬人化し、「おきまざる」ことを意図的な作用とみなすことになる。歌末の「かな」は、霜が以前より置きまざるという様子に対して、木の葉を余さず韓紅に染めて時雨のように落葉させようという意図として見立てたことへの感動を示すものであろう。

霜が置くことが以前よりもはなはだしくなるのは、季節の推移すなわち秋から冬へかけて次第に外気が寒くなることによる。木の葉の紅葉が深まり、やがて散ることも同様である。

当歌は、この双方の現象を、霜のほうに視点を置き、かつその意図的な作用として紅葉・落葉と結び付けたところに眼目があり、焦点は木の葉ではなく、霜のほうにある。

第二句であえて「しぐる」という語を用いたのには、時雨という現象との関係を意識したからである。時雨が霜とともに、時期的に、紅葉や落葉に関与すると見られていたのであるが、文字どおりの時雨の作用とすれば、当歌における、霜に対する焦点化がぼやけてしまうので、落葉の

比喩とすることで、時雨を背景化したのである。また、その背景化において、「おきまさる」の「まさる」を、以前との比較とみなしたが、その作用において、時雨との比較ということも開くかも知れない。

なお、古今和歌六帖の宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本（図書寮叢刊・新編国歌大観・和歌文学大系の底本）では、「木葉みなからくれなゐにくるとて霜の跡にも置きまさるかな」（六七五）となっていて、和歌文学大系本は、「霜の跡にも」について、「『跡』は、『後』の意。霜が置いた後にもさらに」とするが、ある程度進んだ紅葉を、霜の置いた痕跡として「跡」と表記したとも考えられる。

第二句を「くくる」とするのはともかくとして、「さらにも」を「跡にも」とするのは、結句に「おきまさる」がある点から、「さらにも」が余剰的な措辞とみなされたこともあろう。ただ、どちらにせよ、紅葉でも落葉でも、霜が木の葉に置くことの結果として想定しているのであるから、紅葉から落葉への展開において、量か頻度かという実際的なこととしてではなく、霜がしたいに「おきまさる」という見方である点に変わりあるまい。

【比較対照】

五言句の句題の「樹紅霜更置」の各語には、当歌の「このは」「からくれなゐ」「しも」「さらにも」「おきまさる」が語順どおりにすべてほぼ対応している。補われているのは、「みな」「しづるとて」「かな」である。

このうち、「みな」については、その「樹」が一本であれ、林になっているのであれ、その葉の全体に「紅」が及んでいることを示すためであって、句題から逸脱するものではない。また、歌末の「かな」については、表景描写的な句題を、心情表出的な歌に置き換えるという、本集における常套手段であって、とくに珍しくはない。

問題となるのは、「しづるとて」の補充である。句題の表現からは、落葉という事態はまったく認められない。「樹紅」に「霜更置」によって、その結果として、そういう事態が予想されるのみである。【語釈】および【補注】において、「しづるとて」を未実現の事態とみなしたのも、句題から予想される事態に対応させようとしたと考えたからに他ならない。その意味で、この「しづるとて」は、そもそも句題にはない時雨という現象を表わすものではなく、落葉の比喩として用いたのである。

なお付言するなら、時期についてはきておき、時雨が降ったり止んだりする小雨であるとしても、そのような降り方までも含んでたとえたと考えがたい。

〔秋雁負霜帰（秋の雁 霜を負ひて帰る）〕

四九 あきのよをさむみなきつつゆくかりのしもをしのぎてゆきかへるらん

【通釈】

秋の夜が寒いので、鳴きながら行く雁が、霜を押し分けて行き来することであろう。

【語釈】

あきのよを 第二句冒頭の「さむみ」に続き、「あきのよをさむみ」の句となる。次項参照。
 さむみなきつつ 「さむ（寒）み」は、ミ語法で、初句「あきのよ（秋の夜）を」を受けて、秋の夜が寒いので、のように、原因・理由を表わす。第二句において、「さむみ」は「なき（鳴）つつ」と句割れになって不自然な表現のためか、用例は本集の「あきのよをさむみなきつつる虫のねはわがやどにこそあまたきこゆれ」（千里集・四五）くらいしか見出せない。この四五番歌の「あきのよをさむみ」は、続く「なき（つる）」のみに係るが、当歌では、秋夜の冷気は霜の発生の原因ともなることから、「しもをしのぎて」にも係ると見られる。全釈には「秋の夜寒く鳴きながら飛びゆく雁は、」、赤人集の同歌（七四）に対して和歌文学大系本には「秋の夜の寒さに鳴きつつ飛びゆく雁が、」と訳されており、読点の位置からは、「鳴き」を修飾すると捉えられているようであるが。

ゆくかりの この句自体は四六番歌の初句とまったく同じであり、意味・用法はその【語釈】該項を参照。ただし、句末の「の」は、底本では本字に傍書されたものであり、本字は「は」で、見せ消らになっている。全釈では本文を「かりの」としながらも、訳では「雁は」のように、主語化している。主格のみを示す格助詞「の」であれば、「雁が」とすべきところであるが、当歌の展開からすれば、底本本来の「は」のほうが自然であろう。【補注】参照。

しもをしのぎて この「しも（霜）」は、地上の草葉などに置くものではなく、「霜雲り（霜雲入）すとかあるらむひさかたの夜渡る月の見えなく思へば」（万葉集・七・一〇八三）のような、空に霞のように充満する霜氣をいう。霜氣で霞むことを、「照玉墀之皎皎、含霜霧之濛濛

（玉輝の皎皎を照らし、霜鶴の濛濛を含む）」（芸文類聚・月・南朝梁・沈約「八詠、望秋月」詩）のように、詩語で「霜鶴」と言う。「しのぐ」は、山や波など移動の障害となる物乗り越える、押し分けて進むの意。雁が霜を「しのぐ」という用例は、三代集ころまでは見出しがたいものの、「天飛ぶや雁の翼の覆ひ羽のいつく漏りてか霜の降りけむ（天飛也 雁之翅乃 覆羽之何処漏香 霜之霏異牟）」（万葉集・十・二三三八）のように、雁は、空に充ちる霜気の中を飛ぶ鳥と考えられていた。これは、「天月廣夜輝、遊鴈犯霜飛」（芸文類聚・雁・梁・蕭子範「夜聽鴈詩」）などもあるように、漢詩的発想の影響を受けたものであろう（『万葉集 三』岩波文庫 二〇一四年。二二三八番歌註参照）。

ゆきかへるらん 「ゆきかへる」は、行き来する。往復するの意。北国（あるいは常世）と往復する雁は、「往還り（こもかしこも旅なれやくる秋）ことにかりりとなく」（後撰集・七・秋下・三六二）、「ゆきかへるたびにとしふるかりがねはいくそのはるをよそにみるらん」（後拾遺集・春上・藤原道信・六九）、「いまはとてこしぢにかへるかりがねははねもたゆくやゆきかへらん」（金葉集・一・春・藤原経通・二八）のように、この語とともに詠まれるのが、一つの類型であった。ただ、当歌は来雁を詠み、当句が「しもをしのぎて」に続くことから、「ゆきかへる」に不自然さも感じる。作者のいる場（都）という限定された城内での往来とも考えられるが、雁のその場面での表現映像にはそぐわない。挙例の後撰集歌と後拾遺集歌とが雁の往還自体を「ゆきかへる」とするのに対して、金葉集歌では、帰雁の帰る動作を「ゆきかへる」とすることから、行く場合も帰る場合も、往復の一部として捉えて「ゆきかへる」で表現しえたと考えておきたい。四七番歌同様、ここでも「ゆき」が第三句冒頭に重なる。「らむ」は、その鳴き声のありようから、「しもをしのぎ」ながら飛び行く雁の様子を現在推量することを表わすと見られる。なお、【補注】参照。

【補注】 夜に、雁の鳴き声を耳にして、その存在や飛行のさまを詠む歌は珍しくはないが、それが霜気を押し分けるさままでを想像するとなると、万葉集には【語釈】に挙例したように見られるものの、古今集以降には、たとえば「白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」（古今集・四・秋上・一九二）と詠まれる情景とは正反対となり、まれである。

当歌は、歌末「らむ」が統括する一文から構成される、句切れなしの一首である。この「らむ」が現在推量であるならば、四六番歌【補注】に述べたように、一首全体が推量の対象となるところであり、じつは本文が「かりは」ではなく「かりの」となっているのも、それゆえである。う。

しかし、一首全体、すなわち雁の鳴き声も飛ぶ姿も、推量の対象であるとすれば、その推量の契機が不明であり、一首の成り立ちとしてはきわめて考えがたい。むしろ、右に述べたように、雁の鳴き声を耳にして、その鳴き具合から、「しもをしのぎて」飛ぶさまを推量するとみなすほうが妥当であつて、それならば、「かりの」ではなく「かりは」という主題化した表現をふまえて、その説明となる下句という一首の部分に示された様子を現在推量するという捉え方が成り立ちえよう。初句からの「あきのよをさむみ」が「なく」のみならず、「しもをしのぎて」にも係るとするの、それに結び付けてのことである。

なお同歌は、赤人集に「秋の夜を寒み鳴きつゆく雁の霜をのみきてたちかへるらん」（七四）とあり、当歌とは下句が異なっている。

【比較対照】

句題と当歌の表現上の対応関係について、特筆すべき点として三点を挙げる。

第一に、句題の「秋雁」を、当歌では「秋」と「雁」に分け、前者は「あきのよをさむみ」、後者は「なきつつゆくかり」のように、それぞれ表現を補っている点である。どちらも補い方としては無理のないものであり、当歌の第一句が句割れになっているのも、そのような措置をとったことによる。単に「秋の雁」としたのでは、五言句の句題に対応させるには、表現が不足したであろう。ただし、その補足自体は、秋夜が寒いこと、鳥や虫が鳴くことを関連付ける常套的な方法をふまえてのことである。

第二に、句題の「負霜」を「しもをしのぎて」とした点である。「負霜」には、赤人集の「霜をのみきて」のほうが即応しようが、当歌では飛行に困難が伴っていること、単なる秋夜の寒さではなく、それゆえの寒さによって「なきつつ」であることを示そうとしたのではないかと見られる。

そして第三には、句題の「負霜帰」は、そのままではあたかも実景描写のようであるが、実際には到底視認しえない様子なのであって、それを、当歌では歌末に「らむ」を用いて推量する形にして、あくまでも想像上の様子であることを明示している点である。

【語釈】で言及したように、「秋夜の霜気」というものが漢詩由来であるとしたら、当歌にそれを示す句題があつたとみなすのは、理の当然である。そのうえで、くだんの句題と歌との関係を見てみれば、以上に指摘した両者の相違をもつて、直訳の域を脱したものたりえていると言えよう。

An Investigation and interpretation of ‘*Oeno Chisato-shu*’ (大江千里集) (12)

KOIKE Hiroaki^{*1} and HANZAWA Kan'ichi^{*2}

This paper is an investigation and interpretation (積論) of ‘Oe no Chisato-shu’ (大江千里集) which is an anthology of Waka (和歌 = ancient Japanese poems) by Oe himself.

In this anthology, as usually called Kudai-waka (句題和歌), each Waka is given one phrase poetic title from Kanshi (漢詩 = ancient Chinese poem) selected by Oe.

The authors of this paper think that the mutual relations between expressions in both Waka and Kanshi have various patterns. So, the central purpose of our investigation is to concretely explicate the actual condition of all these patterns. And first, this paper treats of Waka No.46~No.49 of ‘Oe no Chisato-shu’.

キーワード：大江千里，句題，白氏文集，

*1 リベラルアーツ教育院教授。

*2 共立女子大学文芸学部教授

原稿受付 2023年5月19日